


<ul style="list-style-type: none"> • 「結論を初めに述べる文化」と「結論を最後に述べる文化」 • 会話のときに相手と「なるべく距離を取る文化」と「なるべく近づく文化」 • 「身体接触の多い文化」と「身体接触の少ない文化」 • 「お返し文化」と「反お返し文化」 • いつまでも過去のことを感謝する文化としない文化 <p>ー文化的差種を差異にし、理解することに資すー</p>	<p>文化の3つのテーマの例 (Ib id., p. 184)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 文化的シンボル 子どもの興味を引く旗・紋章、国民的・地理的な重要記念日、祝日にもなうシンボル、幸運・不運のシンボル、動物の表す象徴的意味、歴史や神話の英雄 2. 文化的資産 絵画彫刻・音楽の主要作品、民話に登場する重要人物・出来事・テーマ、伝統的な子どもの歌・詩・ゲーム、伝承物語・伝説、文学、民芸品、紙幣・コイン・切手、料理 3. 文化的行動 挨拶の仕方、祝日の祝い方、ジェスチャー、食べ物・食習慣、買い物、遊び・レクリエーション活動、家庭生活・学校生活、丁寧さの表し方、ペットの種類とペットへの態度、子どもや家族の交通手段
<p style="text-align: center;">疑似体験を通して</p> <ul style="list-style-type: none"> • 飛行機疑似体験 チケット、パスポート、登場手続き、機内、機内食、日付変更線通過等々、機内の疑似体験をさせる。 • 客船、バス(市内観光)、留学等の疑似体験 	<p style="text-align: center;">他国の子どもとの交流 (目標7・5)</p> <ul style="list-style-type: none"> • テーマ(学校生活等のほかに) 校歌、学校新聞、何ヶ月かの天候、子どもたちがよく行くお店、給食(弁当・学校食堂)のメニュー、いま流行していること(遊び、本、歌、ゲーム、マンガなど)。 • 同じ学校にいる海外の子どもとの交流 目標5を理解するのに適した機会が沢山。「なぜそうした行動をとるのか」を考える＝大人も子どもも互いに理解し合うために ＝「あなたはあなた」、「私は私」という皮相的な多様性の多様性の尊重を避けるためにも。

3. 文学 (児童文学等)

英語に慣れ親しむ以外の文学 (児童文学) の効用や方法について基本的なことを学ぶ。

<p style="text-align: center;">文学</p>	<p style="text-align: center;">In the falling snow A laughing boy holds out his palms Until they are white.</p> <p style="text-align: center;">Cf. In the falling snow a laughing boy holds out his palms until they are white.</p>
--	---

<p style="text-align: center;">文学(詩・物語・劇)</p> <p>1. 感じる心 → 豊かな心 考えること</p> <p>2. オーラルコミュニケーション: リズム: 音節、歩容・詩脚 (強弱)、韻律、リフレイン、頭韻・脚韻</p> <p>3. 表現の習得: 書く力・読む力</p> <p>4. 文化の理解・共有 → コミュニケーション</p>	<p style="text-align: center;">1. 感じる心・考える発端</p> <p>1. 豊かな心 (e.g. 先の詩、『賢者の贈り物』)</p> <p>2. 字義通りに読む → 別のことを示している アレゴリー (寓意・寓話)</p> <p>3. 考えること (論理力・批判的思考力を含む)</p>
<p style="text-align: center;">2. オーラルコミュニケーション: 音節等</p> <p>Rain, rain, go away, Come again another day. (マザーグースより)</p> <p>音節 = 母音で考える。どの部分を強く読むか。</p> <p>強強 + 強弱強 (二歩容) 強弱強 + 弱強 + 弱強 (三歩容)</p> <p>レイン レイン ゴウ アウエイ カム アゲイン アナザー デイ</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>音楽: 本来のリズムがメロディで消えることも。詩の方が適切な場合も。</p> </div>	<p style="text-align: center;">頭韻・脚韻・リフレイン (繰り返し)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 頭韻 (Mickey Mouse, Donald Duck) To market, to market, to buy a fat pig; Home again, home again, jiggetty-jig. To market, to market, to buy a fat hog; Home again, home again, jiggetty-jog. To market, to market, to buy a plum cake; Home again, home again, market is late. To market, to market, to buy a plum bun; Home again, home again, market is done. (マザーグースより)
<p style="text-align: center;">3. 表現の習得: 書く力・読む力</p> <p>1. 「とても忙しい ("as busy as a bee")」「非常に冷静で ("as cool as cucumber")」、sour grapes, white elephant</p> <p>2. 読んで理解すること = 絵として思い浮かべられること (cf. "You see?" "I see.") ・ 読んだものを絵で描かせてみる。</p> <p>文字だけ → 音や絵がない = 論理力、思考力 絵本 → 文字理解の補助 * 絵があることによる論理力や想像力への影響を懸念するとき → 口が描いていない絵 (ex. ミッフィー)</p>	<p style="text-align: center;">4. 文化の理解・共有 → コミュニケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> • 英米文学: 子どもの頃に読み、体現しているため、英米人の文化などについてわかる。言語表現文化についてわかる。共通の話題ができる。 • 現代は多文化社会: 色々な国の文学を読むのがいい。
<p style="text-align: center;">教材: 詩・童謡</p> <ul style="list-style-type: none"> • マザーグース Rain, rain, go away, Pat-a-cake, Jack and Jill went up the hill (ほか) • 『アリス』 Humpty Dumpty, There was an old woman who lived in a shoe, Hey diddle diddle, Peter Piper picked a peck of pickled pepper (ほか) 	<p style="text-align: center;">教材: 物語</p> <ul style="list-style-type: none"> • Fables & Fairytales http://www.kidsgen.com/fables_and_fairytales/ 

Joseph Jacobs. *More English Fairy Tales*, 1894.
<http://www.sacred-texts.com/neu/eng/meft/>



英語演劇活動

4. 英語教育

英語教育における学習指導要領の目標について学習する。



<p style="text-align: center;">学習指導要領の目的について</p>	<p>外国語を通じて、()や()について()に理解を深め、積極的に()を図ろうとする()の育成を図り、外国語の()や基本的な表現に()ながら、コミュニケーション能力の()を養う。</p> <p>外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、()、()、()、()などのコミュニケーション能力の()を養う。</p>
<p>外国語を通じて、()や()について()に理解を深め、積極的に()を図ろうとする()の育成を図り、外国語の()や基本的な表現に()ながら、コミュニケーション能力の()を養う。</p> <p>外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、()、()、()、()などのコミュニケーション能力の()を養う。</p>	<p>外国語を通じて、(言語)や(文化)について()に理解を深め、積極的に()を図ろうとする()の育成を図り、外国語の()や基本的な表現に()ながら、コミュニケーション能力の()を養う。</p> <p>外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、()、()、()、()などのコミュニケーション能力の()を養う。</p>

<p>外国語を通じて、(言語) や (文化) について (体験的に) に理解を深め、積極的に () を図ろうとする () の育成を図り、外国語の () や基本的な表現に () ながら、コミュニケーション能力の () を養う。</p> <p>外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、()、()、()、() などのコミュニケーション能力の () を養う。</p>	<p>外国語を通じて、(言語) や (文化) について (体験的に) に理解を深め、積極的に (コミュニケーション) を図ろうとする (態度) の育成を図り、外国語の () や基本的な表現に () ながら、コミュニケーション能力の () を養う。</p> <p>外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、()、()、()、() などのコミュニケーション能力の () を養う。</p>
<p>外国語を通じて、(言語) や (文化) について (体験的に) に理解を深め、積極的に (コミュニケーション) を図ろうとする (態度) の育成を図り、外国語の () や基本的な表現に () ながら、コミュニケーション能力の () を養う。</p> <p>外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、()、()、()、() などのコミュニケーション能力の () を養う。</p>	<p>外国語を通じて、(言語) や (文化) について (体験的に) に理解を深め、積極的に (コミュニケーション) を図ろうとする (態度) の育成を図り、外国語の () や基本的な表現に () ながら、コミュニケーション能力の () を養う。</p> <p>外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、(聞くこと)、(話すこと)、(読むこと)、(書くこと) などのコミュニケーション能力の () を養う。</p>
<p>外国語を通じて、(言語) や (文化) について (体験的に) に理解を深め、積極的に (コミュニケーション) を図ろうとする (態度) の育成を図り、外国語の (音声) や基本的な表現に () ながら、コミュニケーション能力の () を養う。</p> <p>外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、(聞くこと)、(話すこと)、(読むこと)、(書くこと) などのコミュニケーション能力の () を養う。</p>	<p>外国語を通じて、(言語) や (文化) について (体験的に) に理解を深め、積極的に (コミュニケーション) を図ろうとする (態度) の育成を図り、外国語の (音声) や基本的な表現に (慣れ親しませ) ながら、コミュニケーション能力の () を養う。</p> <p>外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、(聞くこと)、(話すこと)、(読むこと)、(書くこと) などのコミュニケーション能力の () を養う。</p>
<p>外国語を通じて、(言語) や (文化) について (体験的に) に理解を深め、積極的に (コミュニケーション) を図ろうとする (態度) の育成を図り、外国語の (音声) や基本的な表現に (慣れ親しませ) ながら、コミュニケーション能力の (素地) を養う。</p> <p>外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、(聞くこと)、(話すこと)、(読むこと)、(書くこと) などのコミュニケーション能力の (基礎) を養う。</p>	

5. 英語教育における ICT 活用

英語教育における ICT 活用の利点などをおさえた上で、実際にデジタル教材を作ってみる。

導入編



<p>小学校の英語教育における デジタル教材づくり体験</p>	<h3>ICTの特性</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・ 時間的・空間的制約を超える ・ 双方向性を有する (インタラクティブ性) ・ カスタマイズを容易にする <p style="text-align: right;"><small>平成23年度文部科学白書</small></p>
<h3>英語教育におけるICT活用の 利点</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・ 英語に関する興味関心を高める ・ 学習効果を高める ・ 進捗確認 / 課題発見に役立つ 	<h3>ICT活用事例</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・ Hi, friends!のデジタル教材 ・ 波形表示機能 ・ テレビ会議システム (テレビ電話) ・ プレゼンテーションソフトで作成した 自作教材
<h3>ICT活用事例</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・ Hi, friends!のデジタル教材 <p style="background-color: #ccc; border-radius: 50%; padding: 10px; display: inline-block;">インタラクティブ性 を有した</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ プレゼンテーションソフトで作成した 自作教材 	

実践編



動画が一枚ずつのスライドになっておらず、動きのある画面となっているため、ここに掲載することは不可能ゆえ、割愛させていただく。

3-2-5. 直接指導学習（「英語教師塾」の学びの過程における指導）

VoD 型学習を進め、振り返りならびに動画コンテンツへの意見を集め、コンテンツの改良をした後、再び学びを続けた後、離島小学校の課題である「生きた」コミュニケーション学習の課題を克服するため、直接指導を行うこととした。

授業は、平成 28 年 12 月 21 日の 14 時 20 分から 15 時 5 分まで、長崎県五島市崎山小学校（6 年生 12 名）と北海道厚真町立厚真中央小学校（6 年生 17 名）を ICT でつなぎ、外国語活動（英語）が行われた。授業は以下の授業案にしたがって行われた。

平成 28 年度 小 6 Skype 活動 実施計画 (3 回目) 第 3 案 12 月 7 日 (水) 発行

1 学 校	厚真中央小学校	上厚真小学校
	長崎県五島市立崎山小学校	長崎県五島市立崎山小学校
2 日 時	12月21日(水)6校時 14:20~15:05	12月20日(火)3校時 10:30~11:15
3 対象学年	第6学年 17名	第6学年 12名
	崎山小 第6学年 12名 ※崎山小6年生については、2日間にわたって(2回)交流活動を行う	
4 指 導 者	富塚教諭 島山教諭 根岸教諭 ジェイク ALT	佐藤教諭 針谷教諭 根岸教諭 ジェイク ALT
5 活動場所	英語教室	6年教室
6 目 標	(1) 既習の表現を最大限に活用し、異なる文化を持つ人とも 臆せずコミュニケーションを図る。 (2) 身近な話題について紹介する交流活動を通し、お互いの違いや共通点を理解する。 (3) 自分たちにとって身近な話題を、発表の形式で初対面の児童へ伝える。	

7 単元計画		
時	学 習 内 容	備 考
1	○交流内容の検討①(第1部の実施内容) ・前回 Skype 活動同様の、4グループに分かれる。 ・前回検討した「学校生活の様子」「厚真町の紹介①、②」「北海道の紹介」に関する情報を整理し、発表内容を準備する。	写真、イラスト マッピングに用いたシート
2	○発表内容の準備	写真・イラストなど
3	○役割分担 ○準備物の整理(イラスト、写真、実物等) ○当日に向けての 口頭練習(「スピーキング」の活動を意識する) ・グループごとに ・学級内で交流	
4	○Skype 交流、振り返り ・タブレット PC×1台 ・テレビ(教室内モニター用) ・ウェブカメラ(広角寄りのカメラ+マイクが使用できる) ・HDMI ケーブル、又は ワイヤレスディスプレイアダプター (テレビとタブレットを繋ぐ) ・ 双方1回ずつ、4グループ(厚真)+4グループ(崎山)=8回の発表を、全体でモニターしながら進行する。両校、交互に発表を行う。 ・ 発表会開始時に、各校校長が相手の学校へあいさつをする。 ・発表の冒頭では、発表者が名前だけの自己紹介を短めに行う。 ・発表は正味3分以内とする(4分×8回でも、32分間) ・発表後、相手の学校の児童が、内容について、①感想を伝え、②質	写真・イラストなど 振り返り用紙

体が、「生きた」コミュニケーション活動の直接指導であったが、授業における ICT の使い方やセッティング、授業中のトラブルへの対応方法を指導したことから「英語教師塾」における「英語教育における ICT 活用」の学びの確認を行う指導ともなった。同時に、授業の内容が前述の授業案のとおり、「既習の表現を最大限に活用し、異なる文化を持つ人とも臆せずコミュニケーションを図る」こと、「身近な話題について紹介する交流活動を通し、互いの違いや共通点を理解すること」、「自分たちにとって身近な話題を、発表の形式で初対面の児童へ伝えること」であることから、「英語教師塾」の「異文化理解教育」の学びを確認する指導ともなった。実際の授業では、互いの小学校の児童が身近な文化を相互に、ジェスチャーや絵などの補助情報とともに英語で伝え、互いにとって自明な日常が相対化されると同時に、違いの中に類似点を発見していた⁹。

内容的には総じて異文化を題材とする授業であったが、アーカイブのコンテンツの一つである「異文化理解教育」で解説された内容を踏まえた授業となっていた。異文化理解とは、可視化もしくは言語化された、つまり自明の差異を認識しあうことではなく、言語化されていない差異を言語化できるようになることである。また、差異の尊重だけが重視される時、単なる認識に終わってしまい、互いの尊重にはならないうえ、差異は別種のことでなく、類似点のない差異、差異のない類似点などないため（あるのならば、そもそも理解が不可能である）に程度の差のことであり、したがって、差異のみならず類似点をも共有することによって、互いの理解と尊重を促進することが重要である。こうしたアーカイブの内容が授業に反映されていた。これを英語文化圏やその他の文化圏の異文化理解教育に発展させていけることは十分期待できる内容であり、「英語教師塾」の一定の効果が見られた。また、教師の活動は、児童にとって難しいと感じられる発表内容に補足説明を入れたり、ICT 機器の操作をしたりといったもので、「英語教育における ICT 活用」の知識が生かされた授業となっており、児童の主体性を重視する行動が目立ち、これによって児童たちの交流学习がより促進され、したがって「生きた」コミュニケーションが促進されることとなった。

「英語教師塾」は直接指導を途中で入れることで、アーカイブによる学習で不可能なことを指導し、かつアーカイブによる学習の成果を直接確認するために重要な方法であると言える。したがって、「英語教師塾」のカリキュラム化においては、この直接指導を1度でも入れるといいと考えられる。

⁹ 本授業の詳しい内容については以下を参照。倉田伸・中村典生・鈴木章能・松元浩一「離島・へき地における学校間交流学习の実践—小学校外国語活動における ICT の活用を通して—」、『長崎大学教育学部教育実践センター紀要』2017年（印刷中）。

第4章 「英語教師塾」の評価、および課題と展望

「英語教師塾」の学びをその後も続け、2017年2月5日（日）、「『学び続ける専門家』としての教師に地理的格差を超えて資する ICT を用いた英語教師塾カリキュラムと実践方法の開発 成果報告会」（長崎大学文教キャンパス 教育学部大会議室）を開催して、最終的な評価・助言をいただき、話し合いを行った。参加者は本事業従事者のほかに五島市教育委員会指導主事、五島市小学校教員、またオブザーバー的な役割から、福岡県教育研修センター、先進的な外国語活動を展開する雲南市立吉田中学校、雲南市立吉田小学校の教員である。福岡研修センターならびに雲南市の小中学校の教員には、「長崎県英語教師塾」のアーカイブを見てもらい、緩やかなパッケージとしてのカリキュラム構想を説明したうえで当日参加してもらい、評価ならびに助言をいただいた。なお、当初の予定ではテレビ会議システムを用いた直接対話型のセミナーを催す予定であったが、スケジュールの都合が合わず、上記の方法を採ることとした。

4-1. 「英語教師塾」の評価・助言

以下、評価・助言について自由に意見を言ってもらった結果を下に箇条書きする。

- ・人が伝えるよさもあるが、こういうのがあればいい。
- ・パワーポイントすらできないと言っている教員がいる。素材を作るということができない。だから「英語教師塾」のコンテンツは非常に役立つ。
- ・ICT を使っているだけで、すでに ICT を活用していると勘違いしている現場教員が多くいる。したがって、この「英語教師塾」のコンテンツは非常によい。
- ・コンテンツ内にある教材が素晴らしい。その素晴らしさは、「研修にも使え、授業でも使えるものがある」という点にある。教師が自分の英語の練習にも使え（研修、それを用いた後、その後で持ち帰って）、授業で使えるということである。
- ・離島が多いので、互いに意見や知識や技術等をシェアすることがしにくい。そこで、こうした「英語教師塾」のようなコンテンツがあると非常にいい。とくに、教材があればありがたい。現場は忙しいので、ゼロからで作るのではなく、少しアレンジして使いたいと思っている教員が多い。そのためにも、ダウンロードできる資料がある「英語教師塾」は非常にいい。
- ・（上記の意見に対して）もともと、長崎県は、あらかじめ用意されている教材を使うのが多い傾向にあり、他府県はオリジナルのものを作っている傾向にある。長崎県の教員の意識改革が必要なことかもしれないが、しかしながら、長崎県に向けた「英語教師塾」ということであれば、そうした作りになっていてもいい。
- ・離島の教員にとって大変ありがたいものである。研修があると、本土の人が想像する以上に大変な負担がある。船の時間を確認して予約し、しかも離島ゆえに1日余分の出張予定を組まなければならない。加えて、出張の前後に学校に上げる書類もかなり煩雑

である。したがって、こういうものがあれば本当にいい。いつでもどこでも視聴できるところがとてもいい。

- ・「助言」というよりも、本来行政がやるべきなのにこういうものを作ってもらったということ、アイデア、内容、すべてこのようなものを作ってもらい、教えてもらったことに感謝する。

- ・方法がいい。コンテンツが一番大切。コンテンツをこれからどうするか。クイズ形式になっているのもいい。授業のイメージが入っていればさらにいい。

- ・長崎県を俯瞰すると、ALT の使い方がなっていない。ALT 任せが多く、ALT も自分が授業をすと思うている人が多い。現場の日本人が一步引いてしまっている。こういう状況は、他県を見ると 10 年前の話という感じがする。五島市では「プロジェクト G」というものがあり、市をあげて英語教育をしているのだが、日本人が中心になってやっている。授業や教材もすべて日本人教員が作っている。長崎県には意識改革や制度改革が必要である。授業の主体を明確にしなければならない。福岡も 2016 年度の調査では、日本人が主体となった授業と ALT 任せの授業が半々あることがわかった。ALT を手厚く準備しているときは、ALT 任せの傾向があるようだ。ALT との人間関係に問題があるところもある。雲南市の吉田町はうまくいっている。ただし、雲南全体ではなく、吉田町に限るが。どこも ALT 任せではなく、担任が主体になることが重要である。JET を積極的に使いましょうというところもあるのだけれど、主体はあくまでも担任であるべきだと考える。原因は日本人教員に英語力や授業に関する学びが足りないところにあると思う。それゆえ、このような「教師塾」のようなものが絶対に必要であると考えられる。

- ・小学校教員だけでなく、中学校教員も、ALT がもっと前面に出てやればいい、という意識が強い。これは国立大学の附属園にもそうした傾向がある。いずれにしても、そうしたところに学生が教育実習に行くと、悪しき再生産が行われる。何とかしなければならぬ喫緊の課題である。

- ・ミドルリーダーは、自信がある人は、次につなげて広げるという意識がある。スーパーティーチャーの事業があるが、これは年度の限度が決まっている。終わったら終わり、ではなく、次に続けるのはどうすればよいか、ということが大きな課題である。財産を残す方法として、このような教師塾の方法をそのまま活用することが考えられる。無料でありダウンロードができる点が魅力的である。学校のものの場合、持ち出しがだめという制約があるので、この方法は非常にいい。

- ・特例校やスーパーティーチャーのような事業が終わると、発信が終わってしまう。しかし、発信は継続していく必要があるし、事業の間であっても発信が足りないと感じる。事業の最中は自分がその期間に出会えた人には伝えることができるが、事業が終わればそれで終わりになってしまう。たださえ、発信が手薄であるのに、もったいないことである。

- ・スーパーティーチャー事業を例にとると、いままでしてきた話を何度もする。同じことをする。そのようなことであれば、こうしたアーカイブにするといい。選んで見ても

らえればいいわけであるから。スーパーティーチャー事業には報告義務があるので非常に煩雑であるため、アーカイブでの実践であれば発信側にとって大きな意義がある。また、まともに伝わっているかどうかわからないし、皆んな時間がないため研修に来るのが大変である。来る方もやる方も大変な面がある。したがって、アーカイブに納めれば、発信側も受信側も大きな利益となる。

アーカイブに納めた場合、対象者を絞ろうと（特定の相手に向けて閉じる）、全員にしようと（一般公開）、そこは自由に設定できる。市教委は授業を見れば一番わかるという。だから授業を公開するのだが、本当は、見てもらいたいのは公開のものだけではない。よって、みんなが見られるようにし、かつ、それを見て、どうなったかというフィードバックができればいい。遠方の学校であるとなかなか授業を見に来ることができない。行事でこられないところもある。何もできない教員や学校がいくつもある。教育委員会もまた、何もできない場合はそれをどうするかということで頭を抱えている。したがって、こうした「英語教師塾」のような方法がとても効果的であると考える。

- ・教室を見せたいという要望がある一方で、見る側も具体的に、たとえば複式の授業などどうしたらいいのか見たい人がたくさんいる。

- ・いい先生の授業を見て、それを真似したり、アレンジしていくというのが多くの先生のやり方である。授業の風景があるといい。もっとも、授業をアップするときは、子どもの顔をぼかすことが必要である。この問題さえクリアできれば、可能であろう。

- ・他のところについて見て知ったものを、すべてバラしてしまうようにすることがまずいと思う。これまでの研修はそうになっている。アーカイブに納めてまとめることで、そうしたことが回避できる。

- ・授業については、いつもパワーポイントにはめ込んで、いちいち作っていった。それが大変だったが、授業案がこの中にあると、それを使えるかもしれない。

- ・中学から下がうまくいっていない。そこで、研究で使えるツールをあげている。中学の教員が下におろすというのは校内研修で行う。研修センターでデータをあげるときは著作権が問題になる。だからこそ、「英語教師塾」のようなものがあると、いろいろな規制にとらわれずに学べるので非常にいい。

- ・本来、こういうことは行政がやらねばならないこと。大学がやっているなんて頭が下がる。

- ・評価のことであれば、授業のイメージがわくと活かせる。この授業のこういうところがいい、というのが具体的にわかれば、つまり価値づけができれば、小学校の教員はわかる。授業が作れる。ここを工夫するともっといい。とくに中学校の教師が、そうした動画、つまり（価値づけの入った）授業が見たいというのがいまの機運である。小学校が変われば中学校も変わる。小学校と中学校の差異は何か、ということもわかる。

- ・動画に授業風景を取り込むのであれば、視聴者にとって近い環境の授業がいい。たとえば、福岡は1クラス40名くらいの授業なので、福岡の教員が見るにはそうしたクラスの授業風景が効果的であるし、長崎は離島が全国の7分の1であるため、福岡のよう

な授業風景より、似たようなところ、つまり、他のへき地や離島の授業風景がためになるはずである。

4-2. 「英語教師塾」の課題と展望

以上、評価・助言をはじめとする意見を記したが、ここから言える課題と展望について考察してみる。

まず、本「英語教師塾」の効果ならびに評価は非常によかった。「理数教師塾」の考察から得た地理的・時間的制約の課題を克服する工夫として VoD 型を中心とした「英語教師塾」を考案したのだが、この目論見が的中したということである。

また、コンテンツも途中で改良を加え、教師が学び、かつその学びをそのまま授業で活用できる工夫を入れた点、つまり、現場でも使える「教材」や「資料」を加えてダウンロードできるようにした点、またそれを解説する「実践編」のビデオを加えたことも、高い評価の対象になったと言える。

さらに、既述のように、研修をビデオ録画してアーカイブ化するという案も大きな効果が期待できることがわかった。これについては、今回の事業においてアーカイブ化しなかったが、さらなるコンテンツの拡充を含めて、アーカイブ化していくようにしたいと考える。

波及効果としては、本「英語教師塾」の方法をそのまま、スーパーティーチャー事業やほかの研修の学びとして各々が活用すれば、全国的な学びの促進が期待できることがわかり、本「英語教師塾」は新たな学びの方法そのものとして好例を提示したと言える。

今後の課題としては、次のことが考えられる。まず、動画コンテンツに授業のイメージを入れる必要がある。現行のアーカイブでは、「導入編」で知識の獲得、「実践編」で授業での具体的な応用を教材とともに示しているが（二つが一つの動画に入っている場合は「導入編」と「実践編」には分けていない）、今後は、知識の獲得のための「導入編」、教材の提示ともに具体的に知識を授業に応用する「実践編」に加えて、「授業イメージ」という項目を設けて一つの教科を構成することが望ましいと考える。

もっとも、授業のイメージを作るにあたって課題も残る。現実として、大学内に小学校英語教育を専門とする教員が少なすぎる。そうであるとき、全国の優れた授業を蓄積していける、行ってみれば「授業 Wikipedia」のようなものを作るという手段が考えられるのかもしれない。

また、動画コンテンツの「導入編」や「実践編」においても、単に講師が一人で解説するだけでなく、たとえば、MOOCs などでも行われているように、対談するような形式も加えて、多様な動画コンテンツを提供する工夫も必要であろう。さらに、Google Handouts のようなウェブ上での口頭の会議システムを埋め込み、リアルタイムでのディスカッションが展開できるようにすることも考えられ得る工夫の一つである。

これらのことについては今後、改善をして、さらに充実した「英語教師塾」を作り、展開していこうと考える。

以上が「英語教師塾」の動画コンテンツの今後の課題であるが、視聴する側についても一点課題が残る。現行の「英語教師塾」では IOS の端末が必要である。つまり、アップルの端末が必要になる。これは、アーカイブへのアクセスの利便性や安全性、信頼性などの諸々のことを考えた末に、iTunesU が現時点では最良の選択と考えた結果であるが、教員が必ずしもアップル端末をもっているわけではない。ウィンドウズ系ほかが使えるように、さらなる汎用性を考える必要がある。

第5章 まとめ

5-1. 本事業調査のまとめ

「教師塾」とは、そもそも学び続ける教師に資するものである。そうであれば、教師を文字通りの意味でファシリテートするものが教師塾の位置づけとならねばならない。廣江・畑田が長崎県下の小学校教員に対して外国語活動を巡るアンケートを行った結果からわかるように、多くの教員が課題に直面し、かつ課題を克服したいと考えている。したがって、「英語教師塾」の存在は大きな意義がある。しかしながら、現在非常に忙しい日々を送る教師の学びを、移動等によってさらに時間を奪って止めてはならない。長崎県が多くの離島を抱えている現状を考えれば、「英語教師塾」を一定の場所で開講するのは、学びたい教師の意識を削ぎ、学びそれ自体の機会をかえって奪う。このことは長崎大学で行われている「理数教員塾」の考察からも裏づけられた。こうしたことから、「英語教師塾」は ICT を活用した課題解決型の学び、すなわち、VoD 型を中心とし、教師がいつでもどこでも必要なときに学べるものとし、教師に寄り添う学びの場とする必要がある。

もちろん、VoD 型にして教師の意志に任せるだけでなく、カリキュラム化することで一定の学びを促進する方法もある。それには、教師が抱える時間的・地理的課題にさらなる負担をかけないようにするため、教師が備えておくべき知識や技術、すなわちコア・カリキュラムの中から教師自ら課題点を意識化させ、自分の課題点の克服を促進していけるよう「英語教師塾」が下支えをするといった緩やかなパッケージのもとで実践することが賢明である。パッケージの中には、直接指導の機会を1度は入れ、学びの促進具合をチェックするとともに「英語教師塾」のコンテンツでは補いきれない部分を指導することで、教師の学びがいつそう促進されるものとする。また、若手に比べて比較的英語力や授業の方法に自信を持ってないミドルリーダーを対象として「英語教師塾」を提供すれば、外国語活動の授業の質の底上げを図ることができ、同時に、若手に対する指導もより有益なものになると考える。

上のことから、本「英語教師塾」では、ミドルリーダーが直面している外国語活動における課題点をあぶり出し、それを「英語教師塾」のコンテンツにすることとした（もちろん、課題点は人によって様々であるはずなため、今後はコンテンツを増やしていく予定でいる）。使用したアーカイブは、利便性、信頼性、安全性の面から iTunesU とした。ここに受講者がアクセスし、動画を視聴する、あるいは動画をダウンロードする、資料をダウンロードする、討議や議論を行うといった活動を通して、学びを促進していくようにした。教師の学びと直接指導を通して、現行のコンテンツと本教師塾の方法に一定の効果があることがわかった。

今後の課題としては、授業のイメージをコンテンツに入れることが挙げられる。また受講者の端末の汎用性もある。そのために克服する課題もいくつかあるが（児童の顔を動画上で見えないようにする、大学には小学校英語の専門家が少ないため、全国の優れた小学校の授業が集まるような方法を考える、iTunesU とウィンドウズ系の OS との関

連性など)、これらを克服する工夫を考えて、よりよい「英語教師塾」を構築・実践していこうと考える。

5-2. 本事業調査の期待できる効果

本事業には汎用性が期待できる。まず、離島を多く抱える地域のモデルになることができる。また、離島の課題は離島独自のものではなく、地方の市町村の課題でもある。都市部には多くの教師が学ぶ拠点となれる場が多くある。また、実際に教師塾も存在する。しかし、地方の市町村では、長崎のように離島を多く抱えずとも、教師が学び続けられる拠点となる場所、具体的に言えば、大学が多くないところもあり、遠く離れた地域に住む教師が時間をかけて通わなければならない、しかも、1時間に2本ほどのバスしかないといったことも決して少なくない。そうした地理的な課題を抱えながらも現職教員が学び続けられる状況を担保できる方法として、本事業は地方の市町村にその一案を提示するものとする。

加えて、一般に行われている研修事業に参加できない教員の支援や、研修事業の蓄積を本事業の方法によって行うことで、研修の発信側も受信側も満足いく学びが促進される可能性がある。これは教育委員会が抱えてきた課題を克服する方法でもあり、本事業がそうした課題の克服案となり得るものとする。